



# 『栄花物語』初花巻冒頭の春日祭使頼通の造型をめぐって

中島, 和歌子

---

**(Citation)**

國文論叢, 57:56-70

**(Issue Date)**

2021-11

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/0100477483>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100477483>



# 『栄花物語』 初花卷冒頭の春日祭使頼通の造型をめぐる

中 島 和歌子

## はじめに

『栄花物語』の第八の巻名「初花」は、卷十一の長和二年（一〇一三）七月の禎子内親王（母は妍子）誕生の記事に見え、寛弘五年（一〇〇八）九月の敦成親王（母は彰子）の誕生を指す。以下、作品内の順や作品の違いとは無関係に、本文の引用順に通し番号を付していく。各種傍線や括弧は引用者に拠る。

①されど東宮（敦成）の生れたまへりしを、殿の御前（道長）の御初孫にて、栄花の初花と聞えたるに、この御事（禎子誕生）をば、つばみ花とぞ聞えさすべかめる。

（卷十一・つばみ花<sup>(2)</sup>二四頁<sup>(1)</sup>）  
「栄花の初花」と言うべき道長の「初孫」敦成誕生と前後の記事は、知られるように『紫式部日記』に依拠しており、初花巻について<sup>(2)</sup>の先行研究は、福長進氏の御論文をはじめ、両者を比較して『栄花物語』の特徴などを追究したものが充実している。

但し「初」という点は、後に掲げる本巻冒頭、長保六年（一〇四〇、七月二十日寛弘に改元）二月、道長長男頼通の春日祭使奉

仕の記事でも重視されていた。倉本一宏氏が「道長の栄花の継承の起点として、大きな意味を持った」と言われ、池田尚隆氏が次のように言われている通りであろう。

道長の男子の本格的な登場による新時代の到来という時代把握が、ここで一年単位の編年体をも越えて巻を区切らせていることは疑いない。同じように巻間に年変りが落ちていた六冒頭が、道長彰子の装着から始まっているのと同じ方法である。

右の指摘が、小学館『新編日本古典文学全集』の『栄花物語』（以下、『新編全集』や『栄花』と略す）の頭注にも記されている。

② 殿（道長）の若君、田鶴君（頼通）十二ばかりになりたまふ。今年の冬、枇杷殿にて御かうぶりせさせたまふ。引入れには閑院内大臣（公季）ぞおはしましける。すべて残る人なく参りこみたまへりけり。御贈物、引出物など思ひやるべし。さてその年暮れぬれば、またの年（長保六年）になりぬ。司召に少将にならせたまひて、二月に春日の使に立ちたまふ。殿のはじめたる初事に思されて、いといみじういそぎたさせ

たまふもことわりなり。よろづにかひがひしき御有様なり。何となくふくらかにてうつくしうおはすれば、かぎりなきものにぞ見たてまつらせたまふ。春日の御供には、世にすこしおぼえある四位、五位、六位、残るなく参らせたまふ。殿は内裏にて御前にて見たてまつらせたまひ、また道のほど御車にても見たてまつらせたまふほど、あはれに見えさせたまふ。たてたまひぬるまたの日、雪のいみじう降りたれば、殿の御前（道長）、

若菜摘む春日の野辺に雪降れば心づかひを今日さへぞや  
る

御返し、四條大納言公任、

身をつみておほつかなきはゆきやまぬ春日の野辺の若菜  
なりけり

これを聞しめて、花山院、

われすらに思ひこそやれ春日野の雪間をいかで田鶴の分  
くらん

など聞えさせたまふ。

またの日はいつしかと殿の御設けいと心ことなり。舎人ども  
もの思ひかしづき、いつしかととりえたてまつりたるさまに  
見ゆるも、その方につけてをかしく見ゆ。

（巻八・はつはな(1)三三三―三三六五頁）

道長らの和歌は、『御堂関白記』（『御堂』）や『御堂関白集』（『後  
拾遺和歌集』）などにも見えるが、『栄花』と全く同じものは無い。

本稿では、和歌の語句の違いや、史実との時期の違いを含め、『栄花』初花巻の冒頭記事の表現の特徴を明らかにすることを目的

とする。いかに頼通の理想化が図られているか、物語における頼通造型の工夫を具体的に取り上げたい。

『栄花』の表現についての研究は、和歌や、「今めかし」や「こ  
たい」などの形容詞・形容動詞、助動詞「き・けり」、年代わり表  
現、年紀、『源氏物語』の引用、服飾など、様々な観点から行われ  
てきている。本稿は、基本的に観点ごとではなく一場面について  
取り上げるものだが、その中で、他の場面との関係にも触れたい。

## 一、呼称、史実との共通点・相違点

頼通は、初花巻冒頭が三度目の登場である。前二箇所も、当然  
「田鶴君」と呼ばれていた。二つとも挙げておく。

③大納言殿（道長）は、土御門の上（倫子）も宮の御方（明子）  
も、みな男君をぞ生みたてまつらせたまひける。殿の若君を  
ば、田鶴君とつけたてまつらせたまひける。宮の御方の（頼  
宗）をば、（中略）巖君いははきとつけたてまつりたまへり。

（巻四・みはてぬゆめ(1)二〇一頁）

④かくて十月に御賀あり。土御門殿にてせさせたまふ。（中略）  
殿の君達二所は童にて舞ひたまふ。高松殿の御腹の巖君は納  
蘇利舞ひたまふ。殿の上の御腹の田鶴君陵王舞ひたまふ。／  
この君達の御うつくしさを、誰も誰も涙とどめず見たてまつ  
る人々多かり。

（巻七・とりべ野(1)三四一―三四二頁／三四三頁）

前者③は、頼通と頼宗が同年のようにも読めるが、実際には、『新編全集』の頭注にあるように、頼通が正暦三年（九九二）誕生（『公卿補任』寛弘三年以下）、頼宗は一歳下だった（同・長和三年

以下)。二人の妻妾が「みな男君」を生んだと言うことによつて、跡継ぎが確保できた道長や、その結婚を評価している。なお頼通誕生の時点では、道隆が閑白で、道兼も健在であり、道長が摂関家を継げる可能性は低かった。

後者④は、長保三年「十月」の詮子四十の賀の記事で、ここでも頼通・頼宗が揃つて登場する。一見、下位のはずの頼宗が頼通と対等に扱われていると解されるが、童舞について「君達二所」「君達のうつくしさ」などと二人を対等に扱うことは、頼宗ではなく頼通のほうを持ち上げていることに留意しておきたい。

『権記』十月七日条の内裏での試楽の記事に、先に「龍王」を舞つた頼通が「給御衣」つたので、道長が「退下、拜舞」し、さらに「雖似輕忽、不堪感悦」「称天長地久、跳而舞」つたことを記した後、行成は次の「納蘇利」を、「舞腰、得天骨」可レ謂「神妙」と絶賛している。賀の当日の「小右記」十月九日条にも、後の「納蘇利」が「極優妙」で、「主上」以下が「感歎」し、「拭涙者」が多く、右大臣顕光の奏上で、頼宗の舞の師の多吉茂が榮爵に預かつたことが見える。その時道長は「忿怒」して座を立てってしまった。理由は、左大臣を差し置いて奏上したと、龍王、兄、既愛子、中宮弟、当腹(倫子)長子。納蘇利、外腹子。其愛、猶淺。今、被賞納蘇利師」たことだという。

『栄花』も、童舞の順を逆にし、「納蘇利」を先に挙げ、「陵王」を後にしている点は、評価の違いを踏まえているのかもしれない。さて、「殿の若君」の「殿」は、③では「土御門殿」だったが、②の初花巻では、道長を指すと考えてよいだろう。④の「殿の君達二所」の「殿」と同じである。頼通はこのように既に二度登場

しているが、冒頭で「殿の若君田鶴君」と改めて紹介される。

②の「今年の冬」について、『新編全集』の頭注に、前のとりべ野巻が長保四年の秋、「八月二十余日」の淑景舎原子(定子妹、東宮妃)の死で終わり(史実は同年八月三日)、その続きと見れば長保四年の冬となるが、本巻の内容から翌長保五年の冬であることが指摘されている(『日本古典文学大系』にも同様の指摘がある)。さらに、「冬」に頼通が元服したとする点や任少将の時期が史実と異なることも、頭注に見えている。『栄花』に無い事柄を含め関連事項を補い、表形式で挙げておく(波線は『栄花』独自)。

表1 はつはな巻冒頭の出来事と年次

元服	史料類の記事の要約	『栄花物語』の本文
長保五年二月二十日庚辰	『権記』『日本紀略』『本朝世紀』等	今年(長保五年)の冬(十二月か)
<ul style="list-style-type: none"> <li>十二歳、枇杷殿</li> <li>尊者(加冠)公季、理髮正光</li> <li>禁色及び東宮昇殿を許される</li> <li>妍子(十歳)も同時に着裳</li> <li>頼通正五位下、妍子正四位下</li> <li>諸卿参入</li> <li>贈物、引出物</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>残る人なく参りこみ</li> <li>贈物、引出物</li> </ul>	
加階任官	<ul style="list-style-type: none"> <li>五年二月二十八日侍従</li> <li>五年八月十六日除目で右近少将</li> <li>六年正月七日叙位で従四位下</li> <li>(東宮去年御給)『権記』『補任』</li> <li>六年正月二十四日除目で近江介</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>またの年(長保六年)、司召(正月)で少将</li> </ul>

史料類の記事の要約	『栄花物語』の本文
出生 長保六年二月五日 『御堂』 ・枇杷殿での出生の儀、饗宴 ・祭使と道長参内	二月 ・いみじういそぎたせ ・内裏にて御前にて ・道のほど御車にても
春日 同二月六日庚申 『御堂』 『御堂関白集』『後拾遺集』 ・和歌四首	たたせたまひぬるまたの日 ・和歌三首
帰京 同二月七日 ・枇杷殿での還饗 ・尚侍綏子（東宮妃）薨去	『御堂』 ・またの日 ・殿の御設け

『栄花』の記事は、実際の事件年次とは前後する場合が少なからずあるが、右の表からもわかるように、頼通の元服、任少将、春日祭使については、史実通りの順である。しかし、間隔が実際よりも狭い。また、少将以外の官位は省かれている。

任少将については、『権記』長保五年八月十六日条に「事（紫宸殿での信濃の駒牽）了還御後、除目。下総、（源）忠良。右近少将、頼通。被<sub>レ</sub>加<sub>レ</sub>任、例<sub>レ</sub>之」とあり、翌日条に「詣<sub>レ</sub>左府」。新少将慶也。府官人等、参入。給<sub>レ</sub>禄・饗」。亦一両卿相以下、脱<sub>レ</sub>衣給<sub>レ</sub>官人以下」と、道長第での近衛府の官人らに対する饗応と賜禄が記されている。「右近少将」は、左近少将には劣るが、『栄花』は左右を示していない。

なお『栄花』が触れていない妍子の着裳については、長保六年中の記事に、「大殿の尚侍の殿（妍子）かならず（東宮に）参らせたまふべきさまに、世の人申すめる」（三六七頁）とあり、済んだことを間接的に伝えている。綏子の死去は、三年前の長保三年春

のこととして、とりべ野巻で既に取り上げていた（三三三頁）。『栄花』では、長保三年（史実は二年）に大病を患ったが復帰できた道長と、対照的にそのまま亡くなってしまふ女性達（道綱室は長保二年。詮子のみ長保三年末に崩御）の一人とされている。

頼通の元服は、實際は祭使の約一年前の長保五年二月二十日庚辰に行われた。『栄花』は加冠の公季のみ取り上げ、理髪の正光には触れない。公季は、この後、敦成五十日の祝宴で、長子実成が道長に盃を勧められた際、父がいるので下座を回ったことに「酔ひ泣き」したことが、『紫式部日記』に基づいて描かれている（四二〇頁）。他に、彰子の二度目の懐妊を聞いて「右大臣、内大臣、こはかかるべきことかは、われらも同じ筋にはあらずや、かうこととのほかなる恥づかしき宿世なりと思さるべし」とあり（四三二頁）、女御の父としての不面目にも触れられるが、池田氏が指摘されたように、「本来彰子と対抗する立場にある」にも関わらず、伊周が「特別扱いされ」、彼らは「対抗者としては影が薄い」。前年の五節の記事で実成が「侍従宰相とあるは内大臣の子、実成宰相なるべし」（四二三頁）と紹介されると合わせて、初花巻で公季は、むしろ息子の父としての役割が与えられている。

また『栄花』は、元服の時期を実際の二月ではなく「冬」と記しているだけなので、十月・十一月も該当するが、弟教通が十一歳で寛弘三年十二月五日癸酉に元服していることから（『御堂』）、読者が十二月を想起してもおかしくはない。

十月・十一月でも大きくは変わらないが、もし十二月に元服したとすると、翌月の除目で直ちに「少将」に任ぜられ、さらに翌月の氏社春日社の祭に、天皇に代わって神馬を奉納する大役を任

されたことになる。なお「春日」の語は、「使」に限らず、②が『栄花』中の初出である。

立て続けにということは、道長の長子の官人としての順調な活躍を印象付けると共に、初仕事を務める十三歳の少年の周辺の心配も一層強く伝わってくる。道長の子が祭使になったのは実際に初めてではあるが、出立に際しての「殿のはじめたる初事に思されて、いとみじういそぎたせたまふもことわりなり。よろづにかひがひしき御有様なり」、当日の「心づかひを今日さへぞやる」、帰京の日の「いつしかと殿の御設けいと心ことなり」といった、父道長の最大限の心遣いの必然性が増すのである。

「初事」の語は、『栄花』中、他に見えない。後掲⑤の『御堂』には、春日祭に「飾馬」を加えたことが前例の無い「初事」だったとある。全般的なことを指す「栄花」との違いはあるが、道長の心尽くしという点は共通すると言えよう。

『栄花』によると、祭使の出立の日、「殿は内裏にて御前にて見たてまつらせたまひ、また道のほど御車にても見たてまつらせたまふ」という。このことについて『新編全集』頭注は、「御堂」二月五日条によると、道長は枇杷殿で盛んな出立の儀式を行ったが、参内や車での見物はしなかったようである」とする。

しかし『御堂』の記事からは、次第通りに祭使や舞人・陪従（楽人）らが内裏（一条院）に参っただけでなく、道長も参内したと考えられる。伝聞であれば、「無歌笛云々」と記すはずである。円融法皇が正暦二年二月十二日に崩御したので、祭の前日の祭使参内の次第（『西宮記』祭使事）の一部が省略された。

⑤祭使頼通、従枇杷殿寢殿立。未前、諸卿、渡殿北面、着

饗。使装束所。午時、饗座定、給装束一。此間、以（橋）道真朝臣、示案内大将（実質）。使（頼通）等還着後、大将来。（中略）遊了、飾馬并引馬等、引出。童四人・手振等、如賀茂祭度。南祭（春日祭）未飾馬引出。此初事也。次、陪従諸大夫・若小男共等、布衣渡庭。（平）維叙、従有（此）中一、之郎等十人、同渡。武者馬十疋、又渡。見物也。少将、従東階下、渡西中門。大藏卿（正光）・頭中将（経房）、相従。頭、如此事、可恐々々。数献之後、受二大将小釵一入夜、事了。（中略）参内間、依御忌月一、無歌笛。（後略）

（『御堂関白記』長保六年二月五日条）

倉本氏は、『栄花』が枇杷殿での出立の儀を記さず「参内」を取り上げていることから、「作者の視点が内裏の女房社会（女の世界）にあったことを示している」とされるが、詳細に描いているわけではないので、必ずしもそう考えなくてよいのではないかと

参内は実際にあつたとして、牛車で頼通の道中を見送ったというほうはどうか。右の記事の「飾馬并引馬等、引出」以下が、出立に当たる。馬や供奉する人々、そして使が出立したのを見届けた後、さらに「数献」を重ね、「入夜」饗宴が終了したとあるの、無理だったのではないかと。倉本氏は「一条の御前」と同様に、「道中において頼通一行をしみじみと見ていた」のも「作者の直接見聞に基づく記事」とされるが、こちらは「新編全集」の「車での見物はしなかった」という解釈の通りであろう。

実際には参内も牛車での見物も無かったという『新編全集』と、両方あったという倉本氏の説の折衷案を提案しておきたい。

但し、いずれにしても『栄花』は、私邸での出立の儀や饗宴に



『御堂関白記』裏書 從二華山院 <sup>レ</sup> 、賜 <sup>レ</sup> 仰。以 <sup>二</sup> 女方 <sup>一</sup> 。 我すらに思ひこそ遣れ 春日野のをちの雪間 をいかで分くらん	『御堂関白集』巻頭 花山院より 我さへに思ひこそ遣れ 春日野の雪間をいか で人の分くらん 〔統後拾遺集〕雜上・ 九八七詞書	『采花物語』初花 これを聞しめして、 花山院、 我すらに思ひこそ遣れ 春日野の雪間をいか で田鶴の分くらん
御返、 三笠山雪やつむらんと 思ふ間に空に心の通ひ けるかな	御返事、 三笠山雪やつむらむと 思ふ間に空に心の通ひ けるかな 〔統後拾遺〕九八七	

一 首目、公任に贈った道長の歌は、『後拾遺集』の注釈書や、妹尾氏の訳、『御堂関白集全釈』（以下『全釈』）では、「今日さへぞやる」の句が明確に訳されている。『全釈』の通釈を引いておく。

若菜摘む春日野に雪が降るものだから、昨日、息子を使として遣り、今日また「心づかひ」という「つかひ」まで遣ることです。（雪降る春日野でどうしているやら）

なお、右の訳には「春日野」とあるが、日記や家集では、「春日の原」であった。道長はそう詠んだのであり、「春日の野辺」は『采花』の用語であることに留意しておきたい。

二 首目の公任の返歌でも、「原」と「野辺」の違いがあるが（『後拾遺集』のみ贈歌「春日の原」で返歌「春日の野辺」）、『全釈』の通釈では、道長歌と同様に「春日野」として訳している。

我が身につまされて、どうしていらっしやるか心配でなりませぬ。雪が降りやまぬ春日野の若菜でしたよ。

公任は、道長の「若菜つむ（摘む）」を受けて、「自分の身をわねって、自分自身のつらさとして感じること」（『全釈』）の意の「身をつむ（抓む）」を詠み込んだ。「御堂関白集」の歌句が、日記の裏書において墨で「（つ）みて」と上書きする前の「（つ）めは」である点は興味深い。ここでは措き、いずれにしても「若菜」は頼通である点に留意しておきたい（道長の歌では、頼通の祭使という務めを若菜摘みに喩えていた）。雪の降りやまない春日野で、初仕事を務めている、年若い我が子を思いやる道長の「おほかな」さに共感した歌である。

なお、公任の長男定頼は時に十歳で、元服前だった。祭使には「童四人」が従うが（前掲⑤）、身分が異なる。特に定頼の同行を考える必要はなからう。

また「四条大納言」は、知られるように、公任の四条第と極官の権大納言（寛弘六年三月四日任）による呼称で、勅撰集での作者名でもある。実際はまだ中納言だった。『采花』では、この後、『紫式部日記』に基づく寛弘五年九月十五日の敦成五夜の産養の記事にも、この呼称で登場する。この直前は、かかやく藤壺巻冒頭の彰子入内用の屏風歌の作者としてで、ここでは長保元年当時の官職の参議（宰相）が用いられていた。

⑥ 和歌は主からなむをかじさは勝るといふらむやうに、大殿（道長）やがて詠みたまふ。また花山院詠ませたまふ。また四条の公任宰相など詠みたまへる、藤の咲きたる所に、紫の雲とぞ見ゆる藤の花いかなる宿のしるしなるらむ  
また、人の家に小さき鶴ども多くかいたる所に、花山院、ひな鶴を養ひたてて松が枝の蔭に住ませむことをしぞ思



「ひな鶴」の存在に触れているのである。時に頼通は八歳、妍子六歳、教通四歳、威子一歳。「松が枝の蔭に住ませむこと」を入内に限らず公家に仕えること全般とすれば、男子を含めることもできる。つまり、初花巻冒頭の花山院の歌の「田鶴」は、道長家の末永い繁栄の予祝として、かかやく藤壺巻の冒頭の「ひな鶴」に連なるものと言えよう。両巻の共通点の一つとしても注目される。

なお、「栄花」中の「鶴」の初出は、長徳二年（九九六）「九月十日のほど」に、配所「播磨」にいる長男伊周を明け暮れ恋しく思つて泣く高階貴子の歌で、二例目が⑥のかかやく藤壺巻である。

⑨夜の鶴都（身や籠）のうちに籠められて子を恋ひつつも鳴き明かすかな  
（巻五・浦々の別（1）二五八頁）

『白氏文集』卷三「五絃弾」の「第三第四絃冷、夜鶴憶<sup>レ</sup>子籠中鳴」を踏まえており、ここでは子を思う親が「鶴」である。

『栄花』の「鶴」は、長寿と親子関係のほか、「白」さの表現でもあった。

寛弘六年「十一月二十五日」の敦良親王誕生時の冬季の「女房の白衣」を、「白妙の鶴の毛衣めでたう、千年のほど推しはかられたり」（はつはな(1)四四一頁）とし、もう一例、禎子誕生後に「御剣」を持参した使への緑の白い女装束も、「鶴の毛衣」と表現している（つばみ花(2)三三頁）。誕生とは逆の、正編末尾の道長の「雪」の中の葬送における「鶴の林」（巻三十・つるのはやし(3)一七二頁）の比喻も重要だが、ここでは省く。

花山院の歌でも、「春日野」の「雪」をかき分けて行く「田鶴」が詠まれていた。「鶴」の「白」、特に誕生場面の「鶴の毛衣」と同様の清新さや「千年」のイメージを想起してよいと思われる。

なお「春日野の雪間をいかで田鶴の分くらん」であり、「分く」の主語は「田鶴」自身なので、「分く」に見分けるの意を含める必要はないだろう。管見に入った諸氏の訳にも見られなかった。

以上、花山院の歌の下の句に『栄花』の独自性、物語としての一貫性があることを述べたが、院から先に贈ってきたことは、『御堂』にも、「従<sup>レ</sup>華山院、賜<sup>レ</sup>仰」とあった。院の歌の上の句「我すらに思ひこそ遣れ」が、道長が公任に贈った歌の下の句「心づかひを今日さへぞ遣る」を踏まえていると考えられることから、『栄花』の「これを聞しめして（花山院が道長と公任の贈答歌をお聞きになつて）」の通りだったのだろう。

なお寛弘元年（長保六年）中、花山院は、九月二十八日夜から三十日夜までの道長・倫子の清水寺参籠・修善の際（『御堂関白集』二三）や、閏九月四日（『御堂』同日条）にも、自ら道長に和歌を贈っていた。

但し『栄花』は、花山院の御製が寄せられたことに対して、「御堂」の「仰せを賜る」という当事者の名譽に感じ恐縮した表現ではなく、「など聞えさせたまふ」とするのみで、謙譲語の「聞ゆ」を用いて道長への敬意も忘れない。

また道長は、花山院に対して、「若菜摘む」とは別の「つむ（積む）」を用いた「三笠山雪やつむらんと思ふ間に空に心の空に」通ひけるかな」を返していた。「空に」「心の」「通ふ」は、「私の心は速く三笠山のみもとに通いゆくのでした。（上の空になっております）」（『全注釈』）という意味に加えて、自分の気持ちや院におのずと通じていた、二人の心は通い合っていたという意も込められているのではないか。例えば『源氏』明石巻では、源氏と

同時期に京の紫の上が絵日記を描き始めたことを、「いかでか空に通ふ御心ならむ、二条の君も」と語っていた(2)二六一頁)。この意味を見出すと、「我さへに」の歌を寄越した院への道長の配慮が伝わってくる。

いずれにしても『栄花』は、日記と家集にある花山院への返歌を省いた。返歌をしたことすら述べていない。『栄花』の道長は、院に返歌をしなくても礼を欠かないのである。実際よりも院と道長の上下関係が弱められている。

さらに、『栄花』で一人一首ずつとすることは、三人を同列に扱っていることにもなる。道長は、和歌でも当代の歌人の双壁に並ぶ存在となっており(この点は⑥の彰子入内との違いである)、また、その三人が連携して「心遣ひ」をやる頼通のやんごとなきが、和歌の贈答二組のままよりも鮮明になっていると言えよう。

### 三、理想化の方法と「ふくらか」「かつぶり」

頼通の春日の使を、親や親世代の、当代一流の文化人であり政治的にも高位の人物達が、私情レベルで思いやつていた。

『栄花』は、公任を「大納言」と高め、花山院への道長の返歌を省くなどして両者の身分差を縮め、特に花山院の歌に幼名「田鶴」を用いることで、院の頼通への配慮を示すと共に、表現レベルでは彰子入内の記事と関係づけていた。歌合の開催など、後に仮名作品を主とする文化の主導者になる頼通の初仕事としても、祭当日の記事が三者による和歌であることは相応しいと言える。

さて、他の人々についてはどのように描かれていたか。

元服の日も、「すべて残る人なく参りこみたまへりけり」と公卿

らに祝われていた。そして使としても、「春日の御供には、世にすこしおほえある四位・五位・六位、残るなく参らせたまふ」と、世間から認められている殿上人や諸大夫が全員供奉したという。これは、『栄花』独自の記事というよりも、祭使が舞人や陪従(前掲⑤「御堂」の「陪従の諸大夫」)等を含めて行くのは次第通りであるのを、支持されているように語ったと考えられる。「四位」については、『御堂』に見える「大藏卿・頭中将」が当時、四位だった。

なお、七年後の寛弘八年二月十五日の頼通春日詣は、まさにこの通りの「追従」があった。『小右記』同日条に、「左衛門督頼通卿、参<sub>二</sub>春日<sub>一</sub>。雲上侍臣、地下四位・五位・六位、悉以<sub>レ</sub>催<sub>レ</sub>役、隨身参入<sub>一</sub>し、一条天皇が「殿上男(藏人)等、皆参<sub>二</sub>春日<sub>一</sub>」と嘆き、資平が二日間、二度とも陪膳に奉仕することになったことなどが見える。

しかしこれらは、いずれにしても本人よりも道長の威光によるものである。頼通の人物造型として重要なのは、前掲②の末尾に一見補足的に、「さまに見ゆるも」「をかしう見ゆ」と韜晦的に述べられた、「またの日」の二文目である。

頼通は、わずか三日のうちに、「舍人ども」つまり近衛府の下級官人達に信頼を得て、彼らは早くも従う気持ちになっているようだったという。これは頼通自身の美德・魅力の表現であり、上手い書き方と言える。「近衛舍人の様子を間接的に伝聞した」(倉本氏)というように、『栄花』の他の資料に見られない独自の記事は、多くの研究者によって史実として扱われる傾向にあるが、必ずしもそうとは限らないだろう。もちろん、この箇所は史実では

ないと断定することもできないが。

「殿の御設け」つまり還饗と賜祿は、「御堂」の長保六年二月七日条に見えている。「使、戌時許、還来。從<sup>三</sup>西時<sup>一</sup>、諸卿着座、数度巡行。此間、殿上人等遊。(源) 濟政朝臣笛。使等、着座。殿上人番飲」の後、賜祿のことが具体的に書かれ、末尾に「立明官人等、賜<sup>三</sup>疋絹<sup>一</sup>」とある。「立明官人」は、この四字で『小右記』寛弘五年九月十五日条等にも見えるので、「立明の官人」か。松明を捧げ持つ下級官人にまで、祿を支給したのである。実際の頼通と「舍人」の関係については不詳だが、道長の特段の配慮は確かにあった。

ところで、初花巻冒頭には頼通の外見的、身体的な美質についても、「何となくふくらかにてうつくしうおはすれば」とあった。容姿にも恵まれているのである。何となくふくらとした可愛らしい様子は、和歌の「若菜」「鶴」の比喻と相まって、初々しさが強く感じられる。

但し、この表現は一回的なものではない。頼通自身、翌寛弘二年の賀茂祭の記事で、再度用いられている。

⑩みな事ども(賀茂祭の行列の準備)なりて、使の君(頼通)

何となう小さくふくらかにうつくしうて渡りたまふ。殿の御前御涙ただこぼれにこぼれさせたまへば、子のかなしさ知りたまへる殿ばらみな同じさまに思し知るべし。(1)三二二頁

この時の祭使は、前述したように頼通ではなかった。「御堂」寛弘二年四月二十日丁酉条にも、「從<sup>三</sup>枇杷殿西<sup>一</sup>対<sup>一</sup>立。使(源) 雅通(時通男で倫子甥)」とある。これは、『栄花』の過誤や、「断片的な資料から使が頼通であるとする解釈が生じ」た(池田氏)とい

うより、最初から受動的ではなく積極的に、物語としてあるべき姿、あるべき出来事を描いたと考えるべきではないだろうか。

初花巻中には頼通以外に、もう二例「ふくらか」がある。

『栄花』中、記事が最長の寛弘五年は、正月の「京極殿」(土御門殿)での道長一家の女性達の華やかな描写から始まる。「彰子の敦成出産を予祝するもの」(三三四頁・頭注)である。妍子の「髪」と「顔」、威子の「色合ひ」などの魅力を、装束と合わせて具体的に述べた後、嬉子の「戴餅」のために参内の遅れる道長を描き、倫子の描写に移る。道長の二歳上で、時に四十五歳。ここにも前後にも年齢表記は無いが、巻二十・御賀は「治安三年十月三日、殿の上の御賀」を描く巻で、「六十」とある(2)三六一頁、三六六頁)。

⑪殿の上(貴子)は、かう君達あまた出でたまへれど、ただ今の御有様二十ばかりに見えさせたまふ。ささやかにをかしげにふくらかに、いみじううつくしき御様姿におはしまして、御髪の筋こまやかにきよらにて、御桂の裾ばかりにて、末ぞ細らせたまへる。白き御衣どもを(後略) (1)三三三頁

「うつくし」は、妍子・威子(三三一～三三二頁)のほか、頼通にも用いられていた。また「髪」の美質は、彰子・威子にも共通し(巻十四・あさみどり(2)一三八頁等)、妍子から禎子内親王に引き継がれていく(巻十一・つほみ花(2)二九～三二頁)。実年齢よりも若く見えるというのも褒め言葉で、しかもかなり極端であり、倫子に仕えた赤染衛門(道長に従った大江匡衡の室でもある)が編者だと考えたと納得できる表現の一例である。正月の一連の記事は、「資料に恵まれた」(三三四頁・頭注)ということだけでなく

も、記憶によって、あるいは文飾によって、書けたのではないだろうか。いずれも注目すべき要素だが、本稿では特に「ふくらかに」に注目しておきたい。

巻中のもう一例は、寛弘七年の賀茂祭の記事の敦成である。『栄花』の賀茂祭は、繰り返し中関白家の悲劇を際立たせるために取り上げられていた。これも、敦成・敦良の誕生で敗北を痛感した伊周が「正月二十九日」に薨去した(四五三頁)直後である。

⑫四月には、殿(道長)、一条の御棧敷にて若宮(敦成)に物(祭当日の行列)御覽せさせたまふ。いみじうふくらかに白う愛敬つき、うつくしうおはしますを、斎院(選子内親王)の渡らせたまふをり、大殿(道長)、これはいかがとて、若宮を抱きたてまつりたまひて、御簾をかかけさせたまへれば(後略) (1)四五六〜四五七頁)

この後、選子と道長(『大鏡』師輔伝は彰子)の「光いづる」「もろかづら」の歌の贈答が続く。『御堂関白集』(冷泉家時雨亭文庫本に「もろかづら」歌あり)、『後拾遺集』(雑五・一一〇七、一一〇八)、『古本説話集』上巻にも見え、「大鏡」と『古本』は敦良の存在も明記している。

これも史実そのままではない。加藤静子氏が、『御堂』の寛弘八年の記事をもとにした記述であることを指摘されている。

⑬見「祭還」。若宮、出給。傳大納言(道綱)・中宮大夫(齊信)候「御車後」。(後略)〔『御堂』寛弘七年四月二十五日甲戌条〕  
⑭暁、従内、若宮・三宮(敦良)・尚侍(妍子)、同道、御二一条家棧敷室。(後略) (同・同八年四月十八日辛酉条)

但し、皇子を「若宮」のみとするのは、前者⑬の七年の「祭の

還<sup>かへ</sup>」のほうだった。初花巻の予祝される道長の後継者が「若君」頼通に限定されているように、外孫も「若宮」敦成に限定されている。

さて「ふくらか」は、初花巻の四例の後、正編中に三例見える。妍子「十九」歳の「御面様のふくらかにをかしげにおはします」(巻十・ひかけのかづら(1)五〇五頁、立后)、禎子「十」歳の「いみじくふくらかに愛敬つき、あてに薫り、えもいはず」(巻十七・おむがく(2)二八九頁、法成寺金堂供養、直前で「髪」も称賛、彰子「三十九」歳の「御有様ささやかにふくらかに、うつくしう愛敬つきをかしげに」(巻二十七・ころもものたま(3)五九頁、出家、前後に「髪」の賞賛も若々しさもあり)で、特殊な語ではないが、使用対象の限定が明らかである。

頼通、貴子、敦成、妍子、禎子、彰子は、もちろん道長の近親者だが、血筋に注目するなら、「ふくらか」は、むしろ貴子の子や孫の容姿の特長と言うべきだろう。頼通の二例②⑩は貴子の例①に先行するが、同じ初花巻なので、後の貴子の例も、初出②の時点で意識されていたと考えることができる。

なお正編中にはもう一例、嬉子の「御腹いとふくらかにて」(巻二十五・みねの月(2)四七八頁)がある。妊婦の様子(親心を懐妊中)なので一見例外的だが、貴子の末娘であり、また懐妊は血の繋がりを表わすことから、無関係とも言えない。

また続編でも、通房「十」歳の「御容貌うつくしう愛敬つき、ふくらかに句はせたまへり」(巻三十二・調合(3)二四三頁)、歿子「愛敬つきふくらかに、ささやかに」(巻三十六・根あはせ(3)三五六頁、入内)、師実「いとふくらかに愛敬つき、匂ひやかなる御有

様」(卷三十九・布引の滝(3)四九二頁、関白賀茂詣)の三人に用いられているが、いずれも道長と貴子の孫であり、「ふくらか」で系譜を表わす正編の方法を継承した可能性が高い。通房のもう一例を引いておく。

⑮殿(頼通)の若君(通房)十一にて御元服せさせたまふ。いみじうふくらかに愛敬づき、にほひやかなる御有様なり。ほどもなく少将にならせたまひて、(賀茂)臨時の祭の舞人せさせたまふ。(卷三十一・譚合(3)二五四～二五五頁)

初花巻冒頭(前掲②)に戻ると、本文には女性が一切見られなかった。祭使出立を見送る場に倫子の姿は見えず、父道長の心遣いに終始しているのだが、「ふくらか」という身体の美質を表わす語から、母親の存在が窺えるのである。「ふくらか」は、頼通の紅顔や初々しさ、柔らかさを表わすだけでなかった。

ところで右の通房の例では、「元服」の語が用いられている。これが統編の「元服」の初出で、その後、一宮親仁(卷三十四・暮まつほし(3)二九二頁)、師実(卷三十六・根あはせ(3)三六九頁)、師通(卷三十九・布引の滝(3)四八二頁)、三宮輔仁(卷四十・紫野(3)五一八頁)、忠実(同・五二〇頁)の例がある。親王二人と、頼通の直系の子孫で撰関となった臣下三人である。

一方正編では、臣下に「元服」の語を用いていない。東宮憲平(卷一・月の宴(1)三四頁)、四宮為平(同・三三六頁、三七頁)、円融天皇(同・七五頁)、東宮居貞(卷三・さまぎまのよろこび(1)一四一頁、一四七頁、一四八頁)、四宮敦道(同・一四五頁、一六六頁)、三宮為尊(同・一六六頁)、一条天皇(同・一六七頁)、一宮敦康(はつはな(1)四六〇頁)、後一条天皇(卷十三・ゆふしで(2)一

二八頁)、三条院四宮師明(卷十四・あさみどり(2)一六七頁)と皇族に限られる。

「かうぶり(冠)」の語は、初花巻の頼通と教通・頼宗(前掲⑦)のほかは、菅原道真の男君達(月の宴(1)六八頁)、一条天皇(さまぎまのよろこび(1)一七六頁、「元服」もあり)、城子所生の皇子達(卷九・いはかげ(1)四七九頁、四宮師明以外)と少ない。正編の臣下の元服は、道真男を除くと、初花巻の道長男に限られる。

『栄花』正編における使い分けに則り、頼通の元服には「かうぶり」の語が用いられた。しかし、「元服」ではなく「かうぶり」を用いたことで、『伊勢物語』初段との共通点が増えたことは確かである。前述したように、『栄花』は道長・公任の歌の「春日の原」を「春日の野辺」に変えていた。また、「うひごと(初事)」の「うひ」、「若君」「若菜」の「若」も共通する語である。初花巻冒頭から初段を想起する読者がいてもおかしくはないだろう。なお「うひ(初)」は、「うひごと」に限らず、②が『栄花』中の初例である。

⑯むかし、男、初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。この男かいまみてけり。思ほえず、ふる里にいとほしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の、着たりける狩衣の裾をきりて、歌を書きてやる。その男、信夫摺の狩衣をなむ着たりける。

春日野の若むらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりし  
られず(後略) 『伊勢物語』一段・一一三頁

頼通は、むしろ恋多き男とは対照的であり、「春日野」に出向いた理由以下、『伊勢』とは異なる要素も多いが、「男」が「みやび」

を解する成人後間もない若者、異性を引き付ける魅力がある男性という点を重視しておきたい。初花巻の後の部分で頼通と具平親王女隆姫との結婚が語られるが、冒頭はその序にもなっていると言えよう。「伊勢」を想起することにより、恋愛も結婚も可能という、異性愛、ひいては子孫繁栄の要素も窺えるのである。

『伊勢』は、例えば伊周男の道雅が前斎宮に通ったことを語る際に、六十九段「狩の使」の段への言及があり（巻十二・たまのむらぎく(2)九〇頁）、編者の念頭にあった先行作品の一つである。また、『紫式部日記』の冒頭近くでは、十七歳の頼通が、女房達と「世の物語」（男女の話）をしみじみとして、「女郎花」の歌を口ずさみつつ去ったことを、「物語」にほめたるを」とこ」のようだと称賛していた（二二六頁）。初花巻冒頭での初段の引用は蓋然性が高いだろう。

## おわりに

前節では、「舍人」らに信頼され支持されているという記述が、本人のリーダーとしての資質を表わす重要な表現であること、「ふくらか」は初々しさだけでなく、母方から継承された身体的美質であり、父道長だけでなく母倫子の存在を間接的に表わしていること、例の少ない「かうぶり」の語が他の「春日野」「初」「若」と共に『伊勢』の初段を連想させ、本人の「みやび」や結婚にも繋がることを述べた。

このように頼通は、政治と文化、公と私、親と子、父と母、内面と外見など、様々な面から誉め言葉を尽くして理想的な「若君」として造型されていた。「栄花」は、理想化してあるべき姿を描い

ている。まさに『源氏』蛭巻の「よきさまに言ふとては、よきことのかぎり選り出で」（③二二二頁）たということなのだろう。他書に見えない記事は史実とされるなど、『栄花』の史料としての高い評価などには疑問を感じるが、『栄花』独自の物語としての描き方の巧みさ、表現の工夫、一貫性をもっと評価されてもよいように思われる。

しかしこのことは、裏を返すと、ライバル達、敗者達は周到に低められているということである。それは明確な批判の形を取っているとは限らない。例えば、初花巻に寛弘二年から四年の記事がほとんどないのも、道長と伊周の融和の期間であることが看過できないだろう。

本稿では、『栄花』が表現の巧みさに注目すべき作品であること、物語としての語りの工夫をより評価すべきことを述べた<sup>10</sup>。

## 注

- (1) 本文は、山中裕・秋山慶・池田尚隆・福長進氏校注・訳『新編日本古典文学全集』の『栄花物語』①③（小学館、一九九五年・一九九七年・一九九八年）に拠り、巻数は(1)③を用い各頁数を示す。ルビは基本的に省いた。他の仮名散文作品も同全集に拠る。また『御堂関白記』『小右記』は『大日本古記録』、『権記』は『史料纂集』に拠り、句読点の位置を一部変え、返り点を付け、旧字体は新字体に変え、誤字は改めた。歌集は『新編国歌大観』に拠るが、適宜漢字と仮名を換え、解釈においては、『御堂関白集』は平野由紀子氏『私家集全釈叢書』（風間書房、二〇一二年）、『後拾遺和歌集』は川村見生氏『和泉古典叢書』（和泉書院、一九九一

年」を参照した。

(2) 福長進氏『『栄花物語』初花巻についての一考察』(『説林』44、

一九九六年三月)、『歴史物語の創造』笠間書院、二〇一一年)。

(3) 倉本一宏氏『御堂関白記―藤原頼通の春日祭勅使をめぐって

―』(『歴史物語講座』7、風間書房、一九九八年)。以下、氏の

説はすべてこちらに拠る。なお山中裕氏編『御堂関白記全註釈 寛

弘元年』(高科書店、一九九四年)／思文閣出版、二〇一二年復刻)

の当該箇所を担当も同氏で、解釈は同じである。

(4) 池田尚隆氏『『栄花物語』巻八「はつはな」の構造をめぐって』

(『新栄花物語研究』風間書房、二〇〇二年)。以下、池田氏の説は

すべてこちらに拠る。

(5) 妹尾好信氏『御堂関白集』読解考―第一歌群・寛弘元年詠の

部―』(『国文学研究資料館紀要』26、二〇〇〇年三月)

(6) 片山剛氏『御堂関白集』試論』(藤岡忠美先生喜寿記念論文集

刊行会『古代中世和歌文学の研究』和泉書院、二〇〇二年)。

(7) 加藤静子氏『御堂関白集』から照射される『栄花物語』(『都

留文科大紀要』76、二〇一二年十月)。なお巻頭の四首は取り上

げられていない。

(8) 「初」の初例は、かかやく藤壺巻の冒頭、彰子入内の際の「女房

の有様ども、かの初雪の物語の女御殿に参りこみし人々よりも、

これはめでたし」(二九九頁)である。散逸物語の名だが、『栄花』

中の「雪」の役割の一つ、清新さの表現と無関係ではなからう。

(9) 引歌の第五句は「世人定めよ」だが、『古今和歌集』恋三・六四

五及び六四六だけでは、話が詳しくはわからない。「世人」は『栄

花』の重要語ゆえ、『伊勢』の「今宵定めよ」ではなくこちらを

採ったのだろう。

(10) このような考え方は、前に所属していた北海道教育大学札幌校

の古典文学研究室で、三・四年次の学生達と『栄花物語』を読ん  
でいく中で得た。

(なかじま わかこ／京都女子大学教授)